

今日年間第十一主日の福音は、ガリラヤの湖のほとりに集って来た人々に語りかけられたイエスのたとえ話の一節です。ガリラヤ湖の湖畔に集まって、イエスの語られるみことばに聴き入った人々のように、私たちもこのミサの中で、あらためてイエスのみことばに耳を傾けたいと思います。ここに集う私たちは、ガリラヤの湖の岸辺でイエスの語られるみことばに耳を傾けた人々とは違って、はじめてイエスのこのたとえ話を聴いたわけではありません。むしろ、今日の福音のたとえ話は、私たちにとってもう何度も聴いたことのある、私たちに馴染み深いたとえ話です。けれども、今日も私たちが聴いた福音のみことばは、それがたとえ話であることによっていつも新しいのです。何故なら、このたとえ話を聴く時、イエスはこのたとえ話によって何を私たちに語ろうとしておられるのだろうかという疑問を私たちの中に新たに生じさせるからです。今日も、そのような疑問を新たに、イエスが語りかけておられるたとえ話に新たな心で耳を傾けたいと思います。

イエスが語られるたとえ話の内容そのものは、土に蒔かれた種が成長して行って豊かな実りを結ぶありさまにしろ、小さなからし種が驚くほど大きく育つありさまにしろ、都会生活を送る私たちはそれを実際に目にする機会がないということを除けば、それほど理解することが難しいものではありません。イエスはこのたとえ話で、今の私たちにとっても、その気になれば誰でも実際に目にする事が出来る事柄を語っておられるのです。けれども、イエスは誰でも目にする事が出来る事柄を語っておられるだけなのではありません。イエスの後につき従って、ガリラヤの湖の岸辺に集って来た人々にイエスが語り聴かせてくださったのは、神の国のたとえ話です。イエスは、人々が実際に目にする事が出来ることをたとえにして、神の国のありさまを語り聴かせてくださっているのです。

しかし、これらのたとえ話でイエスは神の国を語っておられるのだと理解出来たとしても、それだけでは、イエスがこれらのたとえ話によって語ろうとしておられることを理解したことにはなりません。現代社会に生きる私たちは、ガリラヤ湖の岸辺に座って、イエスが語られることに喜んで聴き入っていた人々のように、はゆったりとした気持ちを持たずに、はっきりとした結論を求めがちです。神の国ということ、イエスが語ろうとしておられることの実体を、つまり神の国とは何かということ、をあまりにも性急に知りたいたいと思ってしまう

ます。けれども、それでは、わざわざたとえ話をもって神の国について語られたイエスの意図が台無しになってしまうことになるかもしれません。

神の国についてのこのようなたとえ話を語られたイエスの目には、神の国はこのような姿で見えているのです。このたとえ話で語られていることこそが、イエスの見ておられる神の国のありさまなのです。今日もこのミサの中で、この神の国のたとえ話を聴かせてくださるイエスは、ここに集う私たちにもイエスが見ておられる神の国が成長してゆく喜びを味わわせようとして語りかけておられるのです。

最初にも言いましたが、私たちは、イエスがこれらのたとえ話を語られたときガリラヤの湖畔でそれを聴いた人々のように、初めてイエスのこのことばを聴いているわけではありません。私たちがもう何度も聴いてよく知っていることを、あらためて聴いているということに過ぎないのでもありません。

過ぎ越しの聖なる三日間、主の復活、主の昇天、そして聖霊降臨を祝って来た者たちとして、今日年間第十一主日のミサの中で私たちはあらためて、ガリラヤの湖畔に集って来た人々に語りかけられたイエスのみことばを聴いているのです。そのような私たちは、同じマルコ福音書に語られているイエスの復活の場面を思い起こす必要があるかもしれません。

「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを探しているが、あの方は復活されてここにはおられない。・・・あの方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われていたとおりそこでお目にかかれる。」復活の朝、イエスの墓に行った婦人たちが空になった墓の中で聴いた天使の告知のことばです。主の復活を祝った私たちは、この天使の告知に従って、ガリラヤ湖畔の今日の福音の場面に戻って、あらためて今日の福音を復活されて私たちとともにいてくださる主のみことばとして聴いたのです。

今日もこのミサの中でイエスの十字架の死と復活の記念を行う私たちは、イエスがどのように私たちの中に神の国の種を蒔いてくださったか知っているはずですが、十字架の上に流されたその血によってイエスは私たちの中に神の国の種を蒔いてくださったのです。イエスが十字架の死によって蒔かれた神の国のいのちの種は、イエスの復活によって、青々と育った苗となって弟子たちの中に植えつけられたのです。イエスを十字架の上に見捨てた弟子たちのもとに戻ってきてくださった復活されたイエスは、その愛とゆるしの鍬をもって弟子たちの心を掘り起こし、神の国のいのちの種を植えつけてくださったのです。最初の弟子たちの教会の中に豊かに実った神の国のいのちの種は、幾多の苦難を経て、はるばると聖霊の風に運ばれて、私たちの心の畑にもこぼれ落ちて芽を出したのです。風が吹けば飛んでしまうようなからし種に宿った神の国のいのち

ちの種は、今こうしてイエスの十字架の祭壇を囲んで感謝のミサをささげている私たちの中にも豊かな実りを結んでいるのです。

今日の福音を通して語られるイエスのたとえ話をこのように受け止めることはあまりにも空想的と思われるかもしれませんが、けれども、イエスは私たちにこのような空想の余地を与えるために、あえて、それぞれの人の聴く力に応じて、これらのたとえ話を語っておられるのです。いずれにしても、イエスはこれらのたとえ話をもって神の国を語っておられるのです。そしてイエスが語られる神の国は、イエスがこの私たちの世界とその中に生きる私たち一人ひとりの心のうちにもたらされた神の国です。

畑に蒔いた種の成長して行く様子を期待に満ちた喜びをもって見守る農夫のように、イエスは、私たちの中に蒔いてくださった神の国のいのちの種の成長を確信して待っていて下さるのです。そのようなイエスの期待に応えるために、信仰によって私たちが受け入れた、神の国の小さな種が私たちの中に成長してゆくことを、いのちある全てのものに実りをもたらしめてくださる全能の父なる神、十字架の上に死んだイエスを復活させてくださった全能の父なる神に、私たちのいのちの主イエス・キリストの御名によって祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高